

## 凡例

- 一 底本は永青文庫叢刊『古今和歌六帖(上)』(汲古書院 昭和五八年)とする。漢字、仮名遣いなど底本どおりに翻刻する。ただし、読みやすさを考慮し、濁点を付し、異体字は通常の文字に改めた。またミセケチは「リ」のように文字の左側に傍線を付して表した。校合した本は以下の三本である。
- 一 (ア) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五〇六・一三三) 御所本
- 一 (イ) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五一〇・三四) 桂宮本
- 一 (ウ) 榊原家旧蔵大久保正氏所蔵『古今六帖』 大久保本
- 一 【異同】の項に(ア)を「御」、(イ)を「桂」、(ウ)を「大」と略称して本文の相違を記した。ただし、これらの傍記などは略した。また、漢字、仮名遣いの差は原則として記さない。これらの書誌については別に記した。
- 一 歌には通し番号を付した。和歌の【現代語訳】はわかりやすいように適宜言葉を補うなど配慮した。【語句】には意味とその用例をなるべく挙げた。
- 一 和歌は題のもとに分類されているが、各題については初出の箇所◎印を付し、簡潔な説明を加えた。
- 一 【所載】にはその歌が、他の書物に掲載されていることを示す。
  - 一 例 古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三二／忠岑集Ⅱ・五／……これは古今和歌集の春上の部の一番にあり、また、『私家集大成』において忠岑Ⅰと略称される家集の三二番に、同じく忠岑Ⅱと略称される家集の五番に、その歌があることを示す。原則として、『新編国歌大観』の巻一、二、三、四、五までと、『新編私家集大成』の中古Ⅰ、Ⅱの範囲で集名と歌番号とを記した。ただし歌合の判詞等は除いた。
- 一 特に万葉集はその訓読の様相が『古今和歌六帖』と深い関係があるので、以下のようにした。
  - 一 例 万葉集・一四二二(旧一四一八) 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨
  - 一 イハソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはぼしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりけるかも

これは、『新編国歌大観』の万葉集に基づく。すなわち、漢字本文は西本願寺本の表記、カタカナはその訓読部分を示し、ひらがなは新しく付した訓読である。(旧一四一八)は旧番号である。【参考】には類似しているが同一とは言えない歌、注記として付された作者名などについて述べた。

一 散文学作品の引用は特に断らない場合、『新編日本古典文学全集』(小学館)によった。  
一 五首ずつごとに担当した者の名を後に記した。